

実践事例 2

「進んでいろいろな動きに挑戦し、『わかる』『できる』『かかわる』喜びのある体づくり運動」

倉吉市立関金小学校 田中政哉

1 はじめに

本研究会の体づくり運動グループでは、「進んでいろいろな動きに挑戦し、『わかる』『できる』『かかわる』喜びのある体づくり運動」をテーマに研究を進めている。そして、この研究テーマを実践する上で大切にしている視点が以下のものである。

○体づくり運動の系統図（表）の作成 ○体づくり運動の単元構成の工夫 ○体づくり運動の評価の工夫
これらの視点をふまえて、本実践では次のことを重点に取り組んだ。

- ・運動経験の多い児童と少ない児童がいる中で両者とも満足できる運動量の確保ができる単元構成
- ・友達と関わり合って学習を行うことで、体育学習をより楽しむことができる学習展開

体づくり運動は、技能を習得することを直接のねらいとする学習ではないので、子どもたちには運動の楽しさをしっかりと感じてもらいたい。そして、生活の中に少しでも運動する機会が増えていくことを期待している。そのために、ただ運動ができて楽しいのではなく友達と関わっていっしょに運動するからこそ、より楽しいと感じることができるよう学習を行っていきたいと思っている。

2 研究の実際

「パワーアップ！友達といっしょに」の実践を通して（4年生）

（1）運動の特性

体ほぐしの運動は、手軽な運動や律動的な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分の体の状態に気づき、体の調子を整えたり、仲間と豊かに交流したりすることができることをねらいとして行われる運動である。また、友達と協力したり助け合ったりして様々な運動を行うと、楽しさが増すことが体験できる運動でもある。

多様な動きをつくる運動は、体のバランスをとったり移動をしたりする動きや、用具を操作したり力試しをしたりする動きを意図的に行うことを通して、体の基本的な動きを総合的に身につけると共に、それらを組み合わせた動きを身につけることをねらいとして行う運動である。これらの運動を通して、体の動きを総合的に身につけていくことができる。

（2）児童の実態

○関心・意欲

本学年の児童は男子6名（内2名特別支援学級児童）、女子22名、計28名で体育を行っている。元気がよく活発である児童と体を動かすことをあまり好まない児童がいて、休憩時間の過ごし方はかなり違っている。ただ、業間運動のマラソンや朝運動には意欲的に取り組む児童が多い。体力面では、やはり運動習慣の違いによりかなりの個人差がみられる。

このクラスの特徴として男女の人数の大きな違いから、異性と仲良く接することが苦手な児童が多い。よって学習での教え合いや励まし合いといった関わりは、同性においてはそれぞれみられるが異性とはあまりみられない。

○系統性について

体づくり運動は、「体ほぐしの運動」と1年から4年までの「多様な動きをつくる運動（遊び）」、5、6年生の「体力を高める運動」に分けられる。前学年では、「用具を使った運動」で、ボールを投げたり取ったりする運動や、なわとびを使っていろいろな動きに取り組んだりして、用具を操作する動きを身につけてきた。4年生では、体のバランスや移動、棒やフラフープなどの用具の操作とともに、それらを組み合わせるような学習を展開していく。そして、高学年になると「多様な動きをつくる運動（遊び）」で身につけた動きや動き

の組み合わせをもとに自己の体力に応じた体力作りを実践していくことになる。よって、低・中学年の内に様々な運動経験を積んでおくことはとても大切である。

○学びの姿

かけっこ・リレーの学習ではチームごとに走る順番を工夫して取り組んでいた。また、休憩時間にバトンパスの練習に取り組むチームもあった。ポートボールの学習では、個々のめあてとチームのめあてを持って学習に取り組み、意欲的に学習を行っていた。相手に勝ちたいという意識が強く、対戦形式の運動にはとても積極的である。

一方、個人種目の水泳や高跳びの学習では、自分のめあてをより難しいものにしようとする児童と簡単なものにしようとする児童とがいて、運動に取り組む姿勢が大きく違っている。

学習カードはあまり活用していない。

(3) 単元目標

- 体のバランスや移動、用具の操作などとともに、それらを組み合わせることができるようにする。 【運動】
- 運動に進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、場や用具の安全に気をつけたりすることができるようにする。 【態度】
- 体づくりのための運動の行い方を工夫できるようにする。 【思考・判断】

(4) 単元の流れ

1	2	3	4	5
オリエンテーション ・学習のねらいと学習の進め方を知る。 ・きまりの確認 ・体ほぐしの運動	体ほぐしの運動			
	体のバランスをとる運動をしよう 体を移動する運動をしよう			
	棒を使って運動しよう	フラフープを使って運動しよう	動きを組み合わせた運動をしよう (棒やフラフープを使って)	

(5) 指導の実際

豊かなかかわりの工夫について

(ア)「ひと」とのかかわり

友達との関わり合いを意識させるため上手な動きをしている友達をさがすように意識させた。だれが上手だったか発表させる場を作ったので周りをよくみようとする児童が多かった。

教師自らが手本を示すこともあったが、なるべく上手な動きをしている児童を手本として全体に紹介したり、児童が気づいた運動のこつを発表したりするようにしていった。

友達と動きを相談して行わせる活動を仕組み、必ず友達と関わるようにした。いろいろなパターンを試しているペアもいて運動が広がっていった。

班での活動では、話し合う時間を十分に確保するようにして関わる場面を作った。

(イ)「こと」とのかかわり

いろいろな活動をする中で、競争したり出来映えをテストしたりするようなことはしなかった。自分が納得できる動きをめあてにするようにした。よりよい動きをしようと意欲的に取り組む児童が多かった。



(ウ)「もの」とのかかわり

棒は、木の棒と塩ビパイプにスポンジが巻いてある棒を用意した。木の棒はある程度重さがあり、手でバランスをとるには有効だったが、倒したときに大きな音が鳴るので驚いてしまって思い切った動きができない児童がいた。一方、スポンジが巻いてある棒は、当たったり倒れたりしても気にならなかったので安心して運動に取り組んでいたが、芯となる部分が細かったのでバランスを取ったり棒を立てておいたりする活動には不向きであった。

フラフープの大きさはほぼ同じだったが、古くなっていて、輪がゆがんでいるものもあり転がす活動では苦勞している児童がいた。



3 成果と課題

【成果】

- ・友達との関わり合いを意識させ続けた結果、運動に楽しく取り組むことができた児童が多かった。そして、学習の中で自然と教え合う姿が見られ、いろいろな動きができるようになった児童が多かった。また、動きができなかった児童が「友達が自分のために必死に教えてくれたのでうれしかった。」と言っていて、よい仲間作りになった。
- ・手本をみんなの前で行った児童はとてうれしそうにしている、活動への意欲が持続した。そして、より難しい動きに挑戦しようと積極的に取り組んでいた。
- ・動きを確認する時間は、初めは長かったが、だんだんと児童が学習中にアドバイスし合っていくようになっていき、その分確認する時間が短くなり、運動量の確保ができた。



【課題】

- ・関わり合う児童に偏りがあった。男子は男子同士で集まってしまう、女子とは関わろうとしなかった。女子も女子同士でペアを作ってしまう、いろいろな人と関わろうとする児童は少なかった。
- ・わたしたちの体育の評価欄を使って自己評価をさせたが、運動ができたかどうかで評価をさせたのでほとんどの児童が「できている」になっていた。しかし、教師の目から見ると正しい運動の仕方が分かって正しい動きができているという児童が少なかったように思う。どこまでができていてどこまでができていないかの判断は教師の主観になってしまうところがあり、評価の難しさを感じた。
- ・フラフープは低学年の頃に使って以来触っていなかったもので、児童はとても喜んで運動に取り組んでいた。しかし、普段から使っているものではないので、スナップをきかせて輪を回す動きはできない児童が多かった。体育の学習だけで使うのではなく、休憩時間などにも使って遊ぶことができるような体制を整えていくことも必要であると感じた。また、家庭でもできるような運動の仕方を紹介することもしていかなければならないと感じた。